

特集論文

## 次期学習指導要領に示された国語科の方向性と授業の改善

The directionality shown in the next course of study  
and the improvements of Japanese language classes

須佐 宏  
SUSA Hiroshi

(和歌山大学大学院教育学研究科  
教職開発専攻)

西浦 民子  
NISHIURA Tamiko

(和歌山大学大学院教育学研究科  
教職開発専攻)

受理日 平成 30 年 1 月 27 日

**抄録:**平成 32 年度から完全実施となる次期学習指導要領が、平成 29 年 3 月に公示されたことを受け、学校現場では、周知徹底の動きが今後加速していくこととなる。今回の改訂では、国語科が「国語で正確に理解し、適切に表現する言語能力を育成する教科」であることが改めて示された。今回の改訂によって、今後求められる国語科の授業づくりのポイントとして 7 つの視点を挙げた。また、既に研究が進められてきている複式学級における国語科授業の在り方からもこれからの授業づくりのヒントを見出すことができる。

**キーワード:**次期学習指導要領、国語科、授業づくり、複式学級、複式国語

### 1. はじめに

平成 32 年度から完全実施となる次期学習指導要領が平成 29 年 3 月に公示された。このことを受け、平成 29 年度の夏季休業中には、主幹教諭や現職教育主任を対象にした各教科・領域ごとの研修会が始まった。学校現場では、平成 30 年度から 2 年間の移行期間に全ての教員への周知徹底を図った上で平成 32 年度を迎えられるよう動きが加速していくこととなる。本稿では、次期学習指導要領に示された国語科教育の方向性を明らかにし、今後求められる国語科授業の方向性について論述する。

### 2. 次期学習指導要領における国語科の役割

#### 2.1. 国語科の目標に示された国語科の重責

今回の学習指導要領改訂によって、国語科において行われた主な改定内容について論述する。

今回の改訂では、全ての教科等の目標が

- (1)「知識及び技能」
- (2)「思考力、判断力、表現力等」
- (3)「学びに向かう力、人間性等」

の三つの柱で再整理された。

国語科では、「言葉による見方・考え方を働かせ、

言語活動を通して、国語で正確に理解し、適切に表現する資質・能力の育成を目指す。」ことが目標としてまず示され、先の三つの柱に照らし合わせて、

- (1) 日常生活に必要な国語について、その特質を理解し、適切に使うことができるようにする。
- (2) 日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養う。
- (3) 言葉がもつよさを認識するとともに、言語感覚を養い、国語の大切さを自覚し、国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う。

が示された。

この国語科の目標は、国語科が「国語で正確に理解し、適切に表現する言語能力を育成する教科」であることを改めて示している。これは、様々な事象の内容を自然科学や社会科学等の視点から理解することを主な学習目的としない国語科においては、「言葉を通じた理解や表現及びそこで用いられる言葉そのものを学習対象」とし、他教科等における言語活動との違いを明確にしたものであると言える。

また、このことは、現行の学習指導要領下でも再三言われてきた「各教科・領域における言語活動の充実」をさらに充実促進させていくために、国語科が言語能力を育成する中心的役割を担うということをより鮮明にしたものであり、各教科・領域における学びを促

進するための重責を国語科が担っていることを改めて示していると言えるであろう。

## 2.2. 「現行」から「次期」への改訂内容から見てくる国語科授業の方向性

前述のように、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱で再整理された国語科の指導内容について論述する。

### 2.2.1. 再整理された国語科の指導内容

三つの柱に沿った資質・能力の整理を踏まえ、これまで「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」として示してきた指導内容について、国語で正確に理解し、適切に表現するために必要な「知識及び技能」として、「言葉の特徴や使い方に関する事項」「情報の扱い方に関する事項」「我が国の言語文化に関する事項」を位置づけ、「思考力、判断力、表現力等」には、これまで同様に「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の三領域を位置づけながらも、知識及び技能の習得に係る内容については、先述の「知識及び技能」に位置づけを変更し、資質・能力に基づいた整理を行うとともに、相互に関係づけながら指導効果を上げられるように変更された。

次項では、今回の改訂によって、新たに加えられた指導事項や指導内容の主な改善点について述べることにする。

### 2.2.2. 「知識及び技能」に示された主な改善点

「知識及び技能」に示された指導内容の主な変更点としては、

- ①第5学年及び第6学年への「言葉の働き」の新設
- ②語彙を豊かにする指導事項の系統的指導
- ③情報の扱いに関する事項の新設
- ④我が国の言語文化に関する事項の整理

などが挙げられる。

①は、各学年の(1)アに示されたもので、様々な言語が共通にもつ言葉の働きや役割に関する指導事項である。ここで示されたのは、言葉の働きや役割を理解することによって、自分が用いている言葉の働きや役割を客観的に捉えることであり、国語科で育成を目指す資質・能力の重要な要素である。これまでであった第1学年から第4学年までの指導内容に加え、第5学年及び第6学年にも「言葉には相手とのつながりをつくる働きがあることに気付くこと」を示し、系統的に指導できるようにしている。

②は、(1)のオ「語彙を豊かにすること」に関する指導事項である。これは、平成28年12月21日に示された答申で、特に、小学校低学年における学力差の大きな背景に、語彙の量と質の違いがあるとの指摘が

あったことを踏まえていると考えられる。各学年とも、語句の量を増すこと、話や文章の中で使うこと、語句のまとまりや関係、語句の構成や変化についての理解などについて触れ、語彙を豊かにすることを系統的に指導することとなっている。

③は、(2)として新設されたもので、話や文章の中に含まれている情報の扱い方に関する指導事項である。急速に進む情報化社会において、共通点や相違点、事柄の順序など、情報と情報の関係を理解したり整理したりすることや比較分類の仕方や引用、出典の示し方、辞書や事典の使い方や図などによる語句と語句との関係の表し方の理解などを系統的に指導することとなっている。

④は、(3)として示された我が国の言語文化に関する事項である。「我が国の言語文化」とは、我が国の歴史の中で創造され、継承されてきた文化としての言語やその言語を使用することによって形成されてきた文化的な言語生活、各時代において表現され、受容されてきた様々な言語芸術や芸能などを指している。今回の改訂では、これらに関わる内容が「伝統的な言語文化」「言葉の由来や変化」「書写」「読書」の4つに分けて整理して示された。「伝統的な言語文化」の指導事項として第1学年及び第2学年に示された「イ長く親しまれている言葉遊びを通して、言葉の豊かさに気付くこと」が新たに加えられている。

### 2.2.3. 「思考力、判断力、表現力等」に示された主な改訂点

「思考力、判断力、表現力等」には、A話すこと・聞くこと、B書くこと、C読むことの3領域が示されている。今回の改訂においては、それぞれの領域における言語活動が、ただ活動するだけのものにならないように、それぞれの活動を通じて、どのような資質・能力を育成するのか明確な意図をもって指導できるようにするため、各領域における指導内容をより細かく分けて示している。

A話すこと・聞くことにおいては、『話すこと』『聞くこと』『話し合うこと』の3つに分け、『話すこと』で、「話題の設定」「情報の収集」「内容の検討」「構成の検討」「考えの形成」「表現」「共有」の7つの指導内容が、『聞くこと』で、「話題の設定」「情報の収集」「構造と内容の把握」「精査・解釈」「考えの形成」「共有」の6つの指導内容が、『話し合うこと』で、「話題の設定」「情報の収集」「内容の検討」「話し合いの進め方の検討」「考えの形成」「共有」の6つの指導内容が示された。

B書くことにおいては、「題材の設定」「情報の収集」「内容の検討」「構成の検討」「考えの形成」「記述」「推敲」「共有」の8つの指導内容となった。

C読むことにおいては、「構造と内容の把握」「精査・解釈」「考えの形成」「共有」の4つの指導内容が示さ

れた。「構造と内容の把握」「精査・解釈」においては、前者を、叙述を基に捉える学習過程として、後者を文章中の複数の情報を結び付けて文章に書かれていないことを想像したり解釈したりする学習過程とし、それぞれアとウが説明的な文章を読むことに関する指導内容、イとエが、文学的な文章を読むことに関する指導内容となっている。

また、各領域において(2)として示している言語活動例は、(1)の指導内容について、どのような言語活動を通して育成するのかを例として挙げたものであるが、より活用しやすいように言語活動の種類ごとにまとめられており、C読むことでは、アに説明的な文章に関する言語活動例、イに文学的な文章に関する言語活動例、ウには学校図書館の活用に関する言語活動例が示されている。

A 話すこと・聞くこと、B 書くこと、C 読むことの全ての領域に「考えの形成」の項目を位置づけ、自分の考えを形成する学習過程を重視している点も今回の大きな改訂点であると言える。

#### 2.2.4. 読書指導の充実

先述のように、[知識及び技能]の指導内容(3)には、「読書」の項目が挙げられ、読書に親しむことを通して必要な知識や情報を得たり、自分の考えを広げたりしていけるように、系統的に指導していくことが示された。また、[思考力、判断力、表現力等]のC読むことの言語活動例には、学校図書館などを利用して図鑑や科学的な読み物、事典や新聞などを活用することが挙げられている。

「読書」及び「読むこと」に関する配慮事項にも、「これらの指導を通して、児童の読書意欲を高め、日常生活における読書生活につながるよう配慮することが重要である。また、国語科における読書指導は、国語科以外の、学校の教育活動全体における読書の指導と密接な連携を図っていく必要がある。他教科等における読書の指導や学校図書館における指導、全校一斉の読書活動などとの関連を考慮した指導計画を作成することなどが求められる。」とあり、語彙を豊かにすることの指導内容との関連を図るためにも読書指導の充実が不可欠であることがわかる。

### 3. 「次期学習指導要領」を踏まえた国語科の授業づくりのためのポイント

ここまで、次期学習指導要領に示された国語科の目標や指導内容等についての改訂点について見てきた。本項では、小学校現場での実践経験と学校現場への訪問観察によって得られた授業実践状況および次期学習指導要領に示された指導内容を踏まえ、これからの国語科の授業づくりにおいて、授業者である教師が持っておきたい重点事項として、須佐が2017年11月に堺

市立西陶器小学校での研究発表会の講演時に挙げた7つの視点について述べることにする。7つの視点とは、

- ①目的意識を持って取り組める言語活動を位置づけた単元構想によって主体的な対話を生み出すこと
- ②面白くて力がつく国語授業にすること
- ③丁寧に言葉へ立ち返る指導によって、言葉の力を育成すること
- ④学びの文脈の中で「語彙」を獲得させていくこと
- ⑤音声言語化を重視すること
- ⑥豊富な「読書」体験を位置づけること
- ⑦学年間、小・中学校間の指導内容の系統性を踏まえて指導に活かすこと

である。その詳細について次項以降で述べることにする。

#### 3.1. 目的意識を持って取り組める言語活動を位置づけた単元を構想すること

〔思考力、判断力、表現力等〕のA話すこと・聞くこと、B書くこと、C読むことの全ての領域に「考えの形成」の項目を位置づけられたことから、今回の改訂において、自分の考えを形成する学習過程を重視していることがわかる。話すこと、書くことにおいては、自分の考えを表現することが出来るように、また、聞くこと、読むことにおいては、聞いたり、読んだりした内容に基づいて自分の考えをまとめることができるようにすることを位置づけている。それら各領域における「考えの形成」は、児童が主体的に対象に向き合えるかどうか、また、他者との対話を通して、いかに自己に問い返すことができるかどうか大きなウエイトを占めていると言える。今回の改訂の大前提である「主体的・対話的で深い学び」にもつながる部分である。

しかしながら、国語科においては、対象であるテキストそのものやテキストを読むこと、文を書くことといった言語活動に対して、初めから興味・関心を抱いて「主体的」に取り組める児童は、残念ながらそう多くはない。どちらかと言えば、苦手意識を持っていたり、面白くない教科という意識を持っていたりする児童の割合が多いのが国語科の学校現場における実態である。

よって、まずは、児童が主体的に学習活動へ向かえるようにするために、授業者である教師は、「面白い国語授業」をしなければならない。幸い、『単元を貫く言語活動』という提案がなされるようになってから、和歌山県内でもリーフレットづくりやお気に入りの本を紹介する本の小箱やポップづくり、本の帯づくりなどの言語活動が位置付けられた実践が数多く行われるようになり、「面白い国語授業」が増えた。このことは、全国学力・学習状況調査結果にみる「国語の授業が好きですか」の問いに対する和歌山県内の小中学生の肯定的回答が右肩上がりの結果を示していることから



わかる。

単元の冒頭で、児童が単元全体を見通し、「面白そう。」「やってみたい。」「早く考えたい。」「難しそうだけど、挑戦してみたい。」という思いを持って国語科の学習に向かえるようにしていくことがまず求められている。子供たちが、目的意識を持って取り組める言語活動を位置づけた単元を構想することによって、主体的な対話を生み出していくのである。

### 3.2. 面白くて力がつく国語授業にすること

2つ目は、面白くて力がつく国語授業にすることである。前述のように「面白い国語授業」が増えた一方で、和歌山県では、小・中学校ともに、前述の調査における国語 A、国語 B の平均正答率はなかなか上昇しないという状態が続いてきた。そのことを踏まえて、和歌山県内外で関わらせていただいた様々な研修会で、「面白い国語授業」から「面白くて力がつく国語授業」への転換を提案し、そのために授業者は、

- i . 明確に力をつけるためにどんな言語活動を設定するのか
- ii . どこで必要感のある対話場面を設定するのか
- iii . 深く考えさせるためにどんな問いを用意するのか
- iv . どんなつまずきを予想し、つまずきに対してどのような支援をするのか

の4つを意識する必要があると伝えてきた。

i ～iv の必要性は次の通りである。

前述のように、児童が目的意識を持って生き生きと学ぶ言語活動の設定は不可欠である。しかし、ただ、子供たちが生き生きと活動していればよいのではない。授業者である教師はその言語活動が、ねらった力をつけることにつながっているのかを見極められなければならない。(i)

対話的な学習として、ペア学習やグループ学習を取り入れた授業も増えてきている。しかし、児童が時間を持て余していたり、授業と関係のない雑談をしていたりということも見受けられる。それらの多くは、教師の都合で設定された対話の時間である。児童が対話を必要とする状況を生み出し、そのタイミングで対話の時間を設定する必要がある (ii)

授業の中で教師が発問し、一部の力のある児童だけが答えて進めてしまっている授業も多い。しかし、それでは、上位の児童も下位の児童も力は付いていかない。既習事項に立ち返りながら、新たな気づき、発見を促す問いを用意することによって熟考させ、それによってもたらさせる学びを体験させなければ、自己の更新にはつながっていかない。(iii)

授業者は、事前の児童のみとりから、授業における児童のつまずきを予想し、事前に支援の計画を練っておくことが不可欠である。しかし、実際に授業を行ってみると、想定しなかったつまずきが見られることも

多々ある。しかし、事前にある程度のつまずきを予想し、そのための支援の手立てを持っていることによって、より細やかなみとりができたり、臨機応変の支援ができたりする。(iv)

今回の改訂においては、言語活動を通じてどのような資質・能力を育成するのかを明確に意識できるように、現行の指導要領に比べ、指導内容の細分化が図られている。授業づくりの際には、必ず学習指導要領の解説を傍らに置き、指導内容を常に確かめながら面白くて力がつく国語授業にしていきたいものである。

### 3.3. 丁寧に言葉へ立ち返る指導によって、言葉の力を育成すること

今回の改訂によって国語科の目標に示された「国語で正確に理解し、適切に表現する資質・能力」という文言は、国語科が、他教科とはその趣を異にした「言葉そのものを学習対象としている教科」であることを明確に示していると言える。

よって、国語科の授業では、これまで同様に言葉を丁寧に扱い、言葉に着目させる指導を通して言葉の力を育成していく必要がある。〔思考力、判断力、表現力等〕のC読むこと領域の指導事項「構造と内容の把握」は、叙述を基に、文章の構成や展開を捉えたり、内容を理解したりすることを指している。また「精査・解釈」は、構成や叙述に基づいて、文章の内容や形式について、精査・解釈することを示している。国語科の学習においては、両指導事項に共通して示されている「叙述を基に」「叙述に基づいて」思考することが不可欠である。

前者と後者の相違点としては、後者の方に、「書かれていないことについて、具体的に想像すること」があるが、それは空想ではなく、あくまでも、叙述に基づいての想像である。国語科の学習においては、ともすれば、児童同士が発言を繋ぎながら学ぶことで、高度な言葉のやり取りを見せることがある。

しかし、時としてそれは、叙述を離れた空想から出てきた美しい言葉の羅列である場合がある。教師は、国語授業において、そのような美しい言葉に惑わされることなく、児童が発している言葉が、どの叙述に基づいているのかを的確に判断し、機を逃さずに、丁寧に本文へ立ち返らせることを怠ってはならない。

そのために、教師は、児童が目にするテキストについて、その文章構造はもちろん、細部にわたる表現までを意識した丁寧な教材研究を行う必要がある。

### 3.4. 学びの文脈の中で「語彙」を獲得させていくこと

前述のように、今回の改訂では、「語彙」の習得に重きが置かれている。かの大村はまは、その著書『日本の教師に伝えたいこと』の中で、漢字の指導について「漢字を使いこなせるようにすることは、国語科の

教師の大事な仕事だと思います。漢字を一生忘れないように教えないと困ります。(中略)『なさい』ということばを言わないで、確かに漢字を子どもの心に刻むことはできないでしょうか。」と書いている。大村は、指導する漢字一文字ごとにショートストーリーを考え、そのストーリーと共に漢字を獲得させようとしたのである。これは、新たに獲得させようとする言葉(語彙)をストーリーの中で意味づけ、意識づけて獲得させようとする営みである。大村と同じように全ての新出漢字についてストーリーを提示して指導していくことは難しいかもしれない。しかし、国語の授業をしていると、子供たちが学習の文脈の中で、言葉に対する疑問を呈したり、気づきを発したり、別の言葉で言いかえたりすることが度々ある。

そのとき発せられた言葉は、子供たちの学びの文脈の中で出てきた言葉である。言い換えれば、学びのストーリーの中で出てきた子供たちにとって意味のある「語彙」と言える。大村のように前もって、ストーリーを用意しておくことができないにしても、そうした学びのストーリーの中で発せられた言葉に対して教師が敏感であれば、自然に語彙を獲得させていくことが可能となる。

黒板左端 30cm くらいの縦スペースをいつも「語彙」のスペースとして確保しておき、「言葉の窓」や「言葉の宝箱」「言葉の芽」「言葉のとびら」など、学級独自の名前をつけ、いつでも書き出せるようにしておくことにより、教室における学びの文脈の中で、自然に語彙を獲得できるようにしておくことを提案したい。

### 3.5. 音声言語化を重視すること

今回の改訂では、音読、朗読が〔知識及び技能〕の(1)言葉の特徴や使い方に関する事項として整理して示された。しかし、指導にあたっては、〔思考力、判断力、表現力等〕のC読むことだけでなく、A話すこと・聞くこと、B書くことの指導事項とも適切に関連付けて指導することの重要性も示されている。

実際の国語授業では、C読むことの指導における読み取りについての話し合いやB書くことの指導における作文活動などの授業において、児童の読み声が一度も聞かれない国語授業も多く見られる傾向がある。しかし、上述のように、音声言語化することによって意味理解が促進され、意味理解が深まることによって表現に生かされることになる。

よって、国語科の授業では、いずれの領域の学習の場合も、音声言語化することを重視し、必ず授業の中に位置付けるようにしたい。

### 3.6. 豊富な「読書」体験を位置づけること

2.2.4.に示したように、今回の改訂では、〔知識及び技能〕の指導内容(3)に、「読書」の項目が挙げら

れ、読書に親しむことを通して必要な知識や情報を得たり、自分の考えを広げたりしていけるように、系統的に指導していくことが示された。また、〔思考力、判断力、表現力等〕のC読むことの言語活動例にも、学校図書館などを利用して図鑑や科学的な読み物、事典や新聞などを活用することが示された。以前より国語科の究極の目的は「読書への誘い(いざない)」であるとも言われており、今回の改訂もまたそれをさらに後押しするものとなっている。

学校図書館で選書の時間を設けると、どの子もお気に入りの本を選んでくる。しかし、選んでいる本を見ていると選書に偏りがあることがすぐにわかる。児童には特定のジャンルに偏るのではなく、幅広いジャンルの図書に出会わせたが、教師が一方向的に提示した場合、児童に主体性はなく「しぶしぶ選ぶ」というのが児童の本音であろう。そんな問題を解決してくれるのが、国語科の単元学習に並行読書を位置づけることである。国語科の授業において単元学習が行われているとき、その主教材に関連する図書(例:同一作者の書籍や同じテーマの書籍、シリーズものの書籍など)は、その学習期間限定で、児童にとっての「スペシャルブックス」となる。自ら手を伸ばすことは決してなかったであろう書籍であっても、単元学習における並行読書教材として、教室や教室近くの読書ベース等に提示・紹介されていれば、不思議と子供たちは手を伸ばそうとする。そうした中で、これまでの自己の読書体験にはなかった図書との出会いによって、新たな知識を獲得し、思考力、判断力が促進されていくことになる。

よって、単元学習とリンクした読書体験をできるだけ演出し、自ら進んで本を手にする機会を創出したい。そのためには、教師自身が関連図書についての知識を持っている必要がある。学校図書館司書が常駐する環境であれば、比較的容易に情報を得ることができるが、実際の配置率を見ると各校に配置されるにはまだまだ時間がかかりそうである。現状では、公立の図書館に教師自身が足しげく通い、図書館司書さんに相談したり、すでに配置されている学校図書館司書さんを尋ねて情報を得たりするなどして、教師自身の読書体験を増やしていきたいものである。

### 3.7. 学年間、小・中学校間の指導内容の系統性を踏まえて指導に活かすこと

最後に、学年間、小・中学校間の指導内容の系統性を踏まえて指導に活かすことを挙げておきたい。現行の学習指導要領においても、その解説書の付録ページには、小・中学校共に指導内容の系統性が一目でわかるように一覧表が掲載されており、研修の機会等では、付録ページの活用を促してきた。

次期学習指導要領の解説にも同様の一覧表が掲載されているが、さらに今回の改訂においては、その解説

書の各指導事項のページに小学校であれば、各学年のページにそれぞれ「第1学年及び第2学年」「第3学年及び第4学年」「第5学年及び第6学年」と横並び(当該学年の指導内容には太線の囲み)で表記されており、さらに、「第5学年及び第6学年」の右横には「中学校第1学年」の指導内容欄が設けられており、小1から中1までの指導内容の系統性を各学年ページですぐに確かめられるように表記されている。

中学校でも同様に「第1学年」の左横に「小学校第5学年及び第6学年」の欄が設けられており、小5から中3までの系統性がわかるようになっている。このことは、これまでも大切であると認識されながら、つい疎かになりがちであった系統性の把握を助けるものとなっている。学年間の系統性に加え、小・中学校間の指導内容の系統性も踏まえた指導によって、より学習効果を上げていきたい。

#### 4. 複式学級の国語科学習に見えるこれからの国語科授業の可能性

##### 4.1. 和歌山県における複式学級

平成29年5月1日付学校基本調査によると和歌山県内の複式学級は総学級数に対して約25%にあたる。へき地指定校のみならず、和歌山市内においてもここ数年複式学級が設置されており、和歌山県においては、複式学級の指導法を追求していくことが、様々な実態に即した教育実践につながるのではないかと考える。

##### 4.2. 複式学級における国語科学習の課題と可能性

複式学級における国語科の授業に対して、苦手意識を持つ教師は多く、二学年の国語科学習を組み立てる難しさをよく耳にする。二学年分の言語活動をどう組み立てるのか、言葉にこだわった学習をさせたいが児童の発言を聞き取るのが困難であったり、大切にしたいポイントで教師が直接指導に入りにくかったりする等の課題が挙げられる。最近では、一人学年もあり、教師がその児童にかかりきりになるため、他学年に目が届かないという悩みを聞く機会も増えた。

しかし、小規模校のマイナス面をパラダイム転換させ、様々な条件をクリアしながら効果的な複式国語の実践に取り組んでいる教師も多い。特に、前項までに述べた次期学習指導要領の趣旨や「主体的・対話的で深い学び」の考え方を早くから実践している、複式指導・複式国語の授業は大変興味深く、多くの示唆が得られるものと考ええる。

そこで、次項からは、複式の授業の在り方を長年研究してきている和歌山県広川町立津木小学校5・6年生の中山実践をもとに複式学級の国語科授業に見えるこれからの国語科授業の可能性を探ることとする。

##### 4.3. 複式授業における「主体的な学び」とは

複式国語の授業を成立させるために、多くの教師は以前から「主体的な学習」の在り方を追い求めてきた。教師が直接かかわれない間接指導においても自分たちで学習を進める児童の姿を描き日々取り組んできている。改めて、主体的な学びを作り出す要因は何なのかを考えてみる。

一点目に挙げたいのは学習過程の明確化である。複式学級においては、学習は自分たちで創り出すものであるという姿勢で臨むことを基本とし、主体的な指導過程を教師が持つとともに、児童はそれを学習過程として認識している。つまり、課題把握・一人学び・全体学習・習熟応用を基本的な学習過程と設定し、一時間の流れが全員に浸透しているのである。学ぶ対象の解決に向けてその手順や方法などを確かに把握しておくことは自ら学習を進めていく上で重要な要素である。

二点目は単元設定である。教材を通して育成を目指す資質・能力を明確にし、「何ができるようになるか」を示し、学習の見通しを持つことにつながる。

ここで、津木小学校5・6年生の5年生「大造じいさんとガン」・6年生「やまなし」の指導案(抜粋)を見てみる。(指導案資料参照)

5年生の単元名は「優れた表現に着目して、物語の魅力を伝えよう」であり、6年生の単元名は「作品の世界を読み味わい、自分の感じたことや作品の良さを伝えよう」である。両学年とも登場人物の相互関係や心情、場面についての描写をとらえ、優れた叙述について自分の意見をまとめるとともに発表し合い、広げたり深めたりすることができるという目標に合致しているといえる。

そして、この目標を達成するために、「作品解説カードをつくり、紹介しあう」という言語活動を位置付けている。「一次見通す」の4時間では、ただ活動するだけの学習にならないよう、作品解説カードを書く上で必要な内容を確認しているのも主体的な学びにつながるための活動である。言語活動の中で資質・能力が育成される学習過程が明確化されているといえる。

両学年とも、関連教材の並行読書を取り入れ、椋作品や宮澤作品の世界を、構造と内容の把握や解釈を通して、自分の読みを他者へ発信し、他者からの評価を得るという過程を想定しているのも、児童一人ひとりの興味・関心や意欲を高め個々の主体的な学びにつなげていると言える。

##### 4.4. 複式授業における「対話的な学び」とは

前述のように、複式学級の授業では直接指導と間接指導が組み合わせられて指導過程が成立するが、その中でも教師が直接指導に入らない間接指導の充実が鍵となる。一人学びの時間に充てることもあるが、単なる



個人活動に終わらせることなく、自分たちでいかに学び合えるかが重要である。教師が関わることがなくても、互いの考えや意見を伝えあったり議論したりすることができる姿こそが「対話的な学び」であるといえる。津木小学校5・6年生の本時の指導（2）本時の展開を見てみる。（本稿末尾の指導案資料参照）

5年生は「大造じいさんとガン」を読んで心に残った場面とその理由を、個人→ペア→全体学習の学習過程の中で交流する場面を設定している。6年生は5月と12月の幻燈を比べ、作品の題名が「やまなし」とつけられた意味を考える場面を設定している。初発の感想で出されたそれぞれの気づきを基に学習課題として設定したものである。複式学級での国語の場合、学習課題を児童とともに考えることが間接指導を充実させる手立てにつながるとともに、「何を学ぶか」「どのように学ぶか」を児童同士が共有し、興味・関心を低下させることなく課題に沿って児童同士が互いの知見や考えを伝えあったり議論したり、協働したりすることができるのである。

もちろん、これらの話し合いを充実したものにするために学年に応じた学び方の系統を明確にする必要がある。リーダーとして、フォロワーとして話し方や聞き方、話し合いの仕方などそれぞれに方法を身につけておくことの重要性も付け加えておきたい。このような学習過程が児童の手によって進められるようになった時点で、複式の授業を担当する教師はあえて両学年を間接指導とする「同時間接指導」の時間を設定することがよくある。教師を頼らず自ら学ぶ態度を育成することを目指しているのである。

また、同時間接指導を行う最大の利点は、「わたり」や「ずらし」をせずとも、教師が両学年の学習の状況を同時に把握し、指導の改善を図ることができることである。さらに、個別に適切な助言をタイムリーに行えることで「対話的な学び」をより充実させることができるのである。

#### 4.5. 「深い学び」へつなぐ複式指導

以上のように、複式指導における今日の課題に取り組む中で、少人数の利点を生かし個々が自分の力を発揮することが自己実現の喜びにつながり、学びの過程

を質的に高めていくことが「深い学び」につながるのであると考え、複式指導の可能性は大きいといえる。さらに、2学年で学ぶという利点を生かし、資質・能力を育成するために多様な学習活動を組み合わせて授業を組み立てていくことが可能であり、重要であるといえる。

#### 5. おわりに

「主体的・対話的で深い学び」というキーワードをより具体的にイメージし、国語科でどのような力を子どもたちに付けていくのか、また、そのためにどのような国語科授業をしていく必要があるのかについて、次期学習指導要領の改定内容とそれをふまえた国語科の授業づくりの7つの視点、複式学級における国語科授業の可能性に触れながら述べてきた。

国語科の学習指導要領は、その記載が大きく変わった。しかし、そこに記載された内容は、これまで大切にしてきたことと大きくは変わらない。よりわかりやすく、より使いやすく示されたものであると認識するのが適当ではないだろうか。

国語科は、文字言語を通して理解し、表現する力を育む教科であることは、何ら変わりはない。子供たちが、言葉に対して興味・関心を持ち、生き生きと言語活動を行うことを通して、確かな国語の力を育んでいけるような授業実践が数多く発表されると共に、それらの実践交流が進むよう、微力ながら普及促進に努めていきたい。

#### 引用・参考資料

- 小学校学習指導要領解説国語編 文部科学省（平成29年6月）
- 中学校学習指導要領解説国語編 文部科学省（平成29年6月）
- 初等教育資料 平成29年3月号（No.951）
- 特集解説③国語科における改訂の具体的な方向性 文部科学省初等中等教育局教育課程課
- 初等教育資料 平成29年5月号（No.953）特集Ⅰ 論説③学習指導要領改訂のポイント国語科 菊池英慈
- 「日本の教師に伝えたいこと」（1995）筑摩書房 大村はま
- 「学習指導要領改訂のポイント」- 小学校・中学校国語 明治図書（2017）





## 本時の指導

(1) 本時の目標

第5学年：「大造じいさんとガン」を読んで、最も心に残った場面を選び、その理由とともに自分の考えをまとめることができる。

第6学年：「五月」と「十二月」の二枚の幻灯を比べ、共通点や相違点について感じたことを交流し、題名「やまなし」について、自分なりの考えをもつことができる。

(2) 本時の展開

第5学年		第6学年	
指導上の留意点(・) 支援☆ 評価(評価方法)	主な学習活動	主な学習活動	指導上の留意点(・) 支援☆ 評価(評価方法)
<p>・掲示物を使って、まとめたあらすじについて、大造じいさんの心の動きをおさながらふり返らせる。</p> <p>・気になる場面については、導入部より付箋を貼らせている。その付箋が貼られている場面を意識して、音読するところを選ばせる。</p>	<p>1. 学習メニューを確認する。</p> <p>2. 前時の学習をふり返る。 * あらすじと大造じいさんの心の動きについて * 音読する。 (付箋がたくさん貼られているところを二人で選ぶ。)</p>	<p>1. 学習メニューを確認する。</p> <p>2. 前時の学習をふり返る。</p> <p>3. めあての確認をする。…Ⅰ</p>	<p>・前時に書いた「やまなし」のあらすじをふり返り、かくした結末を確認することで、二枚の幻灯の違いを意識させておく。</p>
	<p>3. めあての確認をする。…Ⅰ</p>	<p>4. みんな学習 ・5時6時の学習でまとめた対比表をふり返り、「五月」と「十二月」の世界の違いについて話し合う。</p>	<p>「五月」と「十二月」の幻灯を比べ、なぜ宮沢賢治は「やまなし」という題名をつけたのか考えよう。</p>
<p><b>最も心に残った場面を選んで、理由とともにまとめよう</b></p>	<p>めあてをノートへ書く。 ・みんなで確認する。</p>	<p>めあてをノートへ書く。 ・みんなで確認する。</p>	
<p>・教材文を繰り返し読んだり、付箋にメモしている自分の思いを再度読み返したりするように促す。</p> <p>・登場人物の関係や心情の大きな変化に着目するよう助言する。</p> <p><b>最も心に残った、魅力ある場面を見つけ、叙述の引用と共に理由を書いている。【発言・ノート】</b></p> <p>・なかなか考えが書けない児童には、付箋を貼った場面を一緒に見て、なぜ貼ったのか理由を聞いて思いを引き出していく。</p>	<p>4. 一人学習 (10分) ・今までの授業での読みや家庭学習の読みの中で、名シーンマーク(付箋)を貼っている場面について、その理由を考え、ノートにまとめる。…Ⅱ</p>	<p>5. 一人学習 (10分) ・なぜ宮沢賢治は題名を「やまなし」にしたのか、自分の考えをまとめる。…Ⅱ</p>	<p>・かのにの兄弟が、それぞれの幻灯の最後に言った会話から「暗」と「明」のイメージをもたせていく。</p>
	<p>5. ペア学習 (10分) ・「心に残った名シーン」について自分の考えを発表し、二人で交流する。</p>	<p>6. ペア学習 (5分) ・ペアで交流し、自分の考え、ペアの友達の見解も合わせて、考えをまとめる。 (グループノートへ)</p>	<p><b>「五月」と「十二月」の二枚の幻灯を比べ、共通点や相違点について感じたことを交流し、題名「やまなし」について自分なりの考えをもっている。</b></p> <p><b>【ノート・発言】</b> ☆なかなか考えが書けない児童には、対比表にもどり、なぜ「五月」ではなく「十二月」に登場する「やまなし」を題名にしたのかという視点を与える。また、宮沢賢治は何を大切にしていたのかを一緒に考えていく。</p>
<p>・「場面の説明」「自分の考え」「理由」という順序で記述が構成されると伝わりやすいことを確認する。</p>	<p>6. まとめる…Ⅲ ・二人が選んだ「心に残る名シーン」について伝え方の順序を確認し、まとめる。 (次時の予告)</p>	<p>7. まとめる…Ⅲ ・それぞれのペアの意見を発表し合い、まとめていく。</p>	<p>・自分の意見やみんなから出された意見をもとに、題名「やまなし」について、再度自分の考えをまとめることで、今日の学習をふり返らせる。</p>
<p>・次時につながるよう、本時で身につけた力を使って「マヤの一生」を読ませる。</p>	<p>7. ふり返る。…Ⅳ ・今日の学習をふり返る。 ・「マヤの一生」の中から名シーン見つけながら読む。</p>	<p>8. ふり返る。…Ⅳ ・めあてに返り、今日の学習をふり返る。</p>	
	<p>9. 次時の予告をする。 ・今日の学習を生かして、キャッチコピーやあらすじ部分のあとの解説まとめ部分を書くことについて確認する。</p>	<p>9. 次時の予告をする。 ・今日の学習を生かして、キャッチコピーやあらすじ部分のあとの解説まとめ部分を書くことについて確認する。</p>	

(つかむ…Ⅰ 考える…Ⅱ まとめる…Ⅲ たしかめる／ふり返る…Ⅳ)